知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【開催日時】平成 24 年９月３日（月）

10 時 15 分～12 時 15 分

【会　　場】御前崎市佐倉公民館　多目的ホール

１　出席者

・発言者　御前崎市において様々な分野で活躍されている方６名（男性３名、女性３名）

・傍聴者　１２９人

２　発言意見

	項　　目	頁数
発言者１	自主防災の役割と訓練の充実	3
2	障害者の社会的役割と有償ボランティア活動	4
3	お茶の販路拡大	9
4	助産院での分娩と課題 母親の能力を生かす場づくり 助産師の活躍の場の拡大	11
5	子育て女性の就労支援	17
6	御前崎海岸の侵食対策	19
3	お茶の効能に関する研究支援	23
3	茶畑を利用したソーラー発電システム	25
傍聴者１	高台移転先の規制緩和	29
2	土地利用計画の見直し	30
3	原発の安全対策	30

＜知事挨拶＞

皆様、おはようございます。

この広聴会というのは、広報、県の方からいろいろな御報告を申し上げるというのと、広聴、広く県民の皆様方の意見を聴くというこの二つのうちの皆様方から御意見を聴く会ということでございます。これは私が３年前にこちらでこの知事職をあずかるようになりましてから進めてきたものでありまして、もう既に 20 回を超えております。

そして静岡県下 35 の市町がございますけれども、27 の市町を回りまして、広聴会として市町を回ってですね、これが 28 番目と。28 番まで何で放っておいたと、こういうふうにお叱りが聞こえてきそうですけれども、遠いところから回るように決めたんです。一番最初思い出しますのは、多分賀茂地域でやったのが最初じゃないかと思います。賀茂ですね、伊豆半島の南の方です。あるいは水窪だとか、大井川の北の奥大井の川根本町であるとか、そういうところから始めてまいりまして、ここが 28 番目ということになった次第でございます。

しかしながら、実はきのうもここに、この公民館ではございませんけれども、浜岡の原発のところで訓練をしておりまして、たまたまいい天気に恵まれたものですから、日焼けをしました。それからまた７月にも移動知事室というのをこちらの近くでいたしまして、そのときに海岸近くにございます避難タワーに上りまして、それからまた丘の上、あそこ何と言うんですか、その固有名詞をちょっと忘れましたけど、ずっと 30 メートルほどのきれいな丘が連なっているんですね。

その丘の上で「アローマ」という大変おいしいメロン、これはクラウンメロンに勝るとも劣らないというおいしいメロンを皆で暑い中いただきました。それは太陽光発電で実験されて、今まではいわゆる油を使っていたんですけれども、太陽光発電でやると取得率が 100％近くなったと、味も均質になったということで喜ばれていましたけれども、こちらは「つゆひかり」が有名でございますが、そのような果物、そしてこういうお花もできるところだということは承知しております。

今日はそれぞれの分野から男性の方３人、女性の方３人、寄っていただきまして、しっかりお話を承るということでございます。私の話をするというのにも増して、皆様方の話を聴くということで、聴き上手になっているかどうか。ただ、聴きっ放しにはしません。聴いて、十分に僕が答えられないことがあっても、ここで幹部が聴いてますので、それは実施に移すために、あるいは実施状況を御説明したり、あるいは今後の方針を必ず御説明

申し上げて、ここで言われていることについては形にしていくというそういう方針でやっておりますので、もし会場の皆さんの中で、最後の方でこれだけはどうしてもということがありましたならば、御発言の機会も、きっと司会の方から与えてくださると思います。それではひとつ２時間長丁場でございますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

＜発言者１＞

私は防災指導員の立場から話をさせていただきます。東日本大震災の映像、そして現地を見たとき、本当にこれが日本で発生した災害なのかと感じました。南海トラフ地震が発生すれば御前崎市も同規模の災害になるのではないかと不安になりました。地震や津波の恐ろしさ、避難方法や避難場所を伝える防災教育、家族で災害時の行動を話し合う家族防災会議も欠かせません。私たちのほとんどは大地震を経験したことがなく、子供は震災に対する知識もありません。大災害を生き抜くために、学校や地域、家庭で、災害時の教育や確認をする必要があります。

さらに、地震は大自然が相手、必ず想定外が起こります。東海地震は甚大で広域的な災害になることは間違いありません。行政が機能しないことも十分考えられます。その際に次々に発生する課題を自主防災会が解決していかなければなりません。想定外に対応するため、避難所運営など、さまざまな角度から防災体制を見直す必要があります。

私たち防災指導員は訓練としまして、主に「家庭内ＤＩＧ（ディグ）」と申しまして、これは地震のとき家の中、家族を守るための訓練であります。そして「ＨＵＧ（ハグ）」といいまして、これは避難所の中の訓練です。避難所で自分がどう対応したらいいのか考える訓練であります。そしてもう一つ、大きく「ＤＩＧ（ディグ）」です。これは自分の住んでいるところの周りの地図上に災害を想像して自分がどのように行動すればいいのか考える訓練であります。

今後の訓練でありますけれども、防災キャンプです。これはほかの地域でやっているところもありますけれども、小学生から大人を対象にしまして、２日がかりで避難所の中で極度のストレス、トラブルに対処する訓練です。それとともに、これは実行したいと思っておりますけれども、真夜中の避難訓練です。暗い中、電気が消えた中、どう避難するかの訓練であります。

もう一つ、津波に対する対処ですけれども、今回商工会の方にお願いをいたしまして、商工会全体、御前崎市約 1000 軒ありますけれども、そのお店に海抜表示する個標を付けて

もらうことになりました。これによって市内ほとんどの場所で自分のいる場所、海抜がわかるようになります。これによって少しでも津波に対する意識を高めたいと思っております。人間の力は自然のエネルギーの前にほとんど微力程度しかありません。だからこそ、自分や大切な人の命を守るため、徹底して備える必要があると思います。今後とも防災指導員として努力してまいりたいと思います。ありがとうございました。

＜発言者２＞

こんにちは、私は地域作業所の代表をしております。私は 55 歳になりました。男の子が２人いて、下の子が 24 歳で重度自閉症です。

縁あって海外で 10 年ほど生活したんですけれども、心に残ることが一つあって、1961 年、今から 50 年くらい前の話なんですが、アメリカでケネディ大統領が当選したときに、ケネディ大統領の教書の中で、社会と障害者というものがどういう関係でなくてはならないかって書かれた文章が、当時アメリカにいたときにありまして、そこがずっとここのグループをつくった元になるかと思うので、皆さん聞いてください。

障害者と社会なんですが、だれも障害者になりたいわけではないんですが、社会は障害者に対して保護や管理を積極的にしてくれます。しかし、「障害者は社会に対してどんな役割があるか、どんな責任を持たなければならないか」ということは、余り日本では言われていません。私がアメリカで主人の仕事の都合で行っていたときに、このことを学んで、ずっと頭のどこかに引っ掛かっていて、日本に帰国したらこれを考えるような団体、グループをつくろうと思って、今から 10 年ほど前につくりました。

私たちのグループは、障害者とその家族が一緒になって、地域に入ってボランティアをする、そういった団体です。よく障害者がボランティアを受けることがありますが、その反対で、できる範囲内で障害者がコミュニティに入ってボランティアをするという団体です。全国でもとても珍しい団体だと思います。今５家族で 12 名でやっておりまして、普通の人が一人で働いて、年間約 1500 時間費やしています。１年中継続的にやっています。

皆さん、「ボランティアって何やっているの？」って思われるでしょうけれども、ボランティアをやるにはお金が要ります。このボランティアをやるために、リサイクルの回収と、それから市立総合運動場のトイレ掃除をやっておりまして、年間 130 万ほどの収益を上げています。必要経費を引いて、約 70 万円ぐらいをここでボランティアしてくれる障害者とその家族に分配しています。

「じゃお金を集める以外にコミュニティに入ってどんなボランティアしているの？」というと、介護施設へ本の配達を、市立図書館の図書ですけど、年間約 1000 冊ほどしております。あと車椅子掃除というのも結構あって、年間 150 台、あとお尻拭きを 1 万枚ほどぼろ切れからつくったり、町内会のごみ収集所清掃、地元の公民館のトイレ清掃をやっております。

特徴なんですが、このグループは有償ボランティアですので、ボランティアをやって、ただということはありません。小銭しか払えないんですけど、結構喜んでやってもらっています。

その次の特徴が、社会福祉事業費の助成金というものを一切もらっていなくて、自分たちで稼いで、自分たちで運営しています。それからよく福祉法人なんかが持っているデイサービスじゃないですが、ああいう作業所というものは持ちません。コミュニティ全体が作業所という考え方ですので、行った先、ボランティア先が作業所と考えてくれればいいと思います。あと自由がすごくほかのところと比べて多いです。責任は持たされますけれども、行く時間とか、やり方はその人に任されています。

こういうことを 10 年やってみて、どこが効果が出たかなんですが、まずボランティアをする側も、それからボランティアをされた側も大変喜んでいて、今では社会の小さな歯車になっているんじゃないかと思います。例えば年間 150 台の車椅子清掃を介護施設でしますと、院内感染というものが今すごく問題なんですが、食べこぼしとかが、やっぱり車椅子についてしまうと、お医者さんというのは抗生物質の提供しかできない。職員だって、そんなに手数が足りないので、とてもじゃないけど、本当、車椅子の掃除をしてくれないと、大変な院内感染の問題になってしまう。

また、それとは別に町内会のごみ収集ステーションのお掃除をすると、これもアパートの入居率が高くなるとか、不動産価格が上がるといった大変地域にいい影響を及ぼしているので、結構社会の歯車にこのボランティアというのがなっていると思います。

そして私たち自身がよく使う国の社会保障サービスですが、こういうボランティアをすることによって、余り行く必要がなくなったという場合、例えば私の息子は 24 歳、重度自閉症ですけれども、この子が毎日デイサービスやショートステイを利用していると、税金で年間 300 万以上いただかなきゃいけない、使ってしまうんですね。10 年こういう生活すると 3000 万、74 歳になるまでこういう生活すると、たった一人の人が、家族の援助のもとにボランティアをする生活をすると、1 億 5000 万くらい、たった一人の人がこれだけの差

が出てきてしまう、それが現実だと思います。

それで、やはり人というのは社会的動物なので、コミュニティに入って人と接した方が精神状態が安定するんですね。だから抗精神薬とか、それから睡眠薬の量がかなり減りました。

あともう一つ、障害者とその家族が「実際にやってみてどうですか」と聞いた中で一番多かったのが、「家族が前向きになった」とか、「家庭が明るくなった」という返事をよくいただいています。ですので、今までは養護学校を卒業すると就職するか、施設にいるか、自宅しかなかったわけですが、こういったグループの結果から見て、もう一つ、自宅にいながらグループをつくって、有償ボランティアをするという方法がいいじゃないかと思います。

最後、今後の課題なんですが、全国からたくさんの方が見えて、100 名以上、なぜかアフリカから来てくださった方がいるんですけれども、大変好評で、見学に来てくれたのはいいんですが、皆さんが訴えたことがあります。これをやりたいんだけれどもできない。一つはリーダーの育成です。やはり普通の人がボランティアをするのとは違う、でも責任は絶対持たなきゃいけないということで、リーダーの育成をする機関がいるということと、それから小さな仕事をしているけれども物置とか、例えばリサイクルとか、洋服とか、みんなから回収した方がいいんだけれども、置く場所がないとか、そんな 10 坪ほどの土地でいいんですが、もしこういうグループの要望があれば、どうか隅っこの方でいいので、空いている場所があったら、ただとは言わないけど、安い値段で貸していただきたい、そういうことがあります。

あと、小さな仕事があったら、こういうグループに与えていただくとうれしいです。例えば市役所の草取りを全部しろというと無理なんですが、この 100 坪くらいの花壇を年間通じてお願いしますといって、小さな仕事を与えてくれると非常にいいと思います。

それから三つ目が、若い親の社会と障害者に対する認識が非常に甘くて、過度な福祉というのは生きる力をなくしていくということをおっしゃる人がいます。だから小さいころから、子供が特別支援学校に行っているときから、親に対して教育をしてほしいと思います。一体あなたのお子さんは将来大人になったときに、社会に対しておんぶや抱っこだけではなくて、何ができるか、そのために何を準備しなきゃいけないかということを、特別支援学校の方を支援して、こういう生きる力を育成してほしいと私は願っています。今日は紹介する場所を与えていただいてありがとうございます。

＜発言者１、発言者２に対する知事のコメント＞

発言者１さんと発言者２さんの話、感心して聞いておりました。お二人とも、分野は違いますけれども、自立というか、主体性というか、そういうところで大変共通されておりまして、これがこの御前崎の文化だとすれば、大した高い文化をお持ちであるというふうに思った次第です。

今、最初の発言者１さんのお話は、防災の指導員を発言者１さんにお願いしているということでございますけれども、上から構おうというのではなくて、家庭で「ＤＩＧ」、これはディザスターのＤ、災害のＤですね、イマジネーションのＩ、それからＧというのはゲームだと思います。こういう災害があった、ではどういうふうにするかということで、家庭内でどこに逃げるかとか、あるいはどの部屋がいいかとか、タンスが倒れないかとか、そうしたことを一つ一つチェックしながら災害に備えるというそういうことの普及活動をしていただいているということで、大変ありがたく存じます。これは県の方も県下全体にそれを訴えておりますが、それをこちらの方でしていただいているということでございますね。

それからまた商工会のリーダーでも発言者１さんいらっしゃいますので、そこと連携をして防災力を高める仕事をしていただいているということで、これも感心いたしました。

実は感心する前にこれはどうかなと。ここの公民館は比較的いいところにありますけど、避難タワーを見に行ったんですけど、あれ 13 メートルでしたね。メーカーどこですかと言ったら大阪だと。何だ、静岡県じゃないのかと思って、それからなぜここですかと言ったら、駐車場が市の持ち物だからと。それでなぜここに駐車場があるんですかと言ったら、あちらにある建物が公民館だからだと言われて、あっ、じゃ公民館で、そこの公民館だと思ったんですよ、私きょう来るのは。ところが違いまして、公民館も複数あるんですね。結構なことでございます。

それであそこは公民館の内陸側に道路がございましょう。その向こうに家がございますね。その向こうが、内陸側が高台になってますね。高台の高さが 30 メートルから 35 メートルでしょう。それじゃもし仮に津波が来ると、地震が起こった後５分 10 分で来るといったときに、その家にいる方たちは、道路を渡って、あの必ずしも上りやすいとは言えない避難タワーに行くかと。今回の津波想定は 19 メートル、３月では 21 メートルと、ここ全体がそうじゃないわけですが、一部のところですね。そしたら海側に逃げますかね。多分内陸側に逃げるでしょう。

そうすると、だれがそこに逃げるのか。公民館にいる人でしょう。公民館よりもさらに海側には工場がありますでしょう。工場はしっかりした大きな建物ですから、屋上の方に逃げるというふうに思います。そうすると、公民館を使っているときだけ、その避難ビル、あるいはそこで遊んでいる人が逃げるかなと思います。ここのところで遊べるかというと、駐車場ですから遊べないと。平時にはどう使いますか。使いようがないとおっしゃる。

そうすると、公民館を仮に丘の上に移したならば、そうすると 3000 万かける必要はないかなという関心があったんですよ。それぐらいのお金があるならば、私は道をつくって、手すりとか、途中でちょっと休むところとかをつくって、丘の上に逃げるように考えた方がよほどいいと。もともと命山があるような感じに見えたので、それを思っていたんですけれども、しかし実際は防災力というか、防災意識が非常に御前崎は高くて、今、発言者１さんのようなお話があるということで安心をいたしました。

それから発言者２さんのお話は、もう本当に御立派なことだと思います。社会があなたに何をしてくれるかではなくて、あなたが社会のために何ができるか、国のために何ができるか、それを考えなさいというそういう思想ですね。そして重度障害者をお持ちで、そしてリサイクルとか、あるいはトイレの掃除であるとか、あるいは車椅子の点検掃除であるとか、小さな仕事があれば、重度障害者でもできると。それが客観的に言えば、これほどの大きな税金の節約になってますよということで、日本には弱い人に対して構うという姿勢がありますけれども、むしろその方の自立を助けるというこういう姿勢の転換を発言者２さんが若いときになさって、たまたまそういうお坊ちゃんをお持ちであるということで、そういう非常に難しい課題だと思いますけれども、実践されているというのは、これはもう御立派と言う以外にありません。

ですから、こういう形での障害者に対する姿勢ですね、障害者の自立をみんなで助けて、何ができるかをこちらで考えて差し上げて、それをできるような、少しずつそういう技術というか、技をお一人お一人が身につけていって、家族が喜び、同じような問題を抱えている人たちに対して希望を与えて、社会が言ってみれば全体として福祉力を上げていくということになりますので、これはもっと広く知られるべきことだなと。今５家族十数名というふうに言われましたけれども、これが 50 家族、百数十人と、さらに 500 家族というように、そういう輪が広がっていくべき、そういう試みであるという感想を持ちました。これからも健康に気をつけて頑張ってください。

＜発言者３＞

私は二十歳のころから茶栽培に取り組んでまいりました。そして現在に至っております。私が就農した当時は、茶畑は大変少なくて、サツマイモやタバコなどが栽培されていまして、お茶も「やぶきた」ではなくて在来種ばかりでありました。昭和 40 年代に入り「やぶきた」茶が盛んに植えられるようになり、現在では茶畑一色となっております。市内の茶園面積も 500 ヘクタールほどになり、主幹作物になったわけでありますが、平成 11 年をピークといたしまして、生産額も年々減少し、今まで御前崎市内ではお茶が首位でありましたけれども、現在ではイチゴの 16 億円に遠く及ばない数字になってしまいました。

昨年私たちの生産しているお茶、10 アール当たりの生葉の販売額は 20 万円ほどで、肥料、農薬、その他諸経費、償却費など差し引いてしまいますと、手元に残るお金は５万円にも満たない数字になってまいりました。家族労働で、たとえ 3.5 ヘクタール栽培できたとしても、年間の収益が 170 万円で、これでは到底やっていけません。収益を上げるには価格の上昇しかないと思われます。昨年の原発の放射能による風評被害も、価格低下に少なからず影響を及ぼしているものと思われます。

我々生産者も茶栽培をあきらめずに、明日を夢見て励んでおりますが、茶は養生の仙薬と八百数十年前に栄西禅師が中国から伝えられてまいっておりまして、最近では掛川市立総合病院の鮫島先生がお茶の効能につきまして、大変研究あるいは調査しております。鮫島先生が研究調査を盛んに行われても、国からの補助金があったわけでありますが、今回国からの補助金がカットされたというお話を聞いております。その点、地域からできたら拠出願いたいと、そういったお話を承ったわけであります。

健康で長生きできるのはお茶のおかげであるとおっしゃっており、現在、つい先ほど発表になりましたが、国民の医療費が 37 兆 8000 億円と、前年に比べまして約１兆円以上増えたという報道をお聞きしました。そういったわけで、この地域、掛川を含める御前崎、菊川、そういった地域が今お茶を飲んでいるおかげで、70 歳以上の方が払う、国の助成も含めましてですけれども、医療費が県下平均で 80 万円でありますが、御前崎、あるいは掛川あたりは 60 万円ほどで済んでいると。それから「健康寿命」といいますが、最近聞くようなことでありますが、静岡は女性が 74 歳、男性が 71 歳ということで、健康寿命日本一だそうでございます。

お茶にまつわる言葉は大変多くあります。茶は神が与えてくれた最良の飲み物である。「日常茶飯事」とか、茶の湯で使います「一期一会」など、茶に携わる者としては大変誇

らしく、勇気づけられるものであります。

静岡県は先ほども県知事さんがおっしゃいましたが、お茶は日本一ということで、現在生葉の生産額は 382 億円で、国内シェア 44%ということであります。しかしながら、個々の経営は小さくて、収益性も鹿児島県に比べれば大分劣っております。

ここで昨年と本年の茶市場で取り扱った静岡と鹿児島のお茶の価格の比較をさせていただきますと、扱い量が 1570 トンで、本年は 2068 円でした、単価が。一昨年は 2314 円、鹿児島のお茶は昨年 3681 トン、本年は 4438 トンと、取扱量は増えているのにもかかわらず、値段は 2515 円ということで、鹿児島のお茶に大分水を開けられてしまっています。

こういったことで放射能の影響は多少戻っておるわけでございます。こういった環境を少しでも払拭して、静岡県の茶業のあるべき姿を今から知事さんにお伺いしてまいりたいと思います。

それから、私は平成 17 年から御前崎つゆひかり普及会の会長ということで就任いたしまして、もう７年になるわけでございます。茶協会が発足するときに、茶商さんの方から、売れ行きがどうもはかばかしくないから何とか生産者側がいい知恵を出してくれんかと、そういったお話を承って、私も悩みに悩んだんですが、皆さんとお話しする中で何とかいい方法はないか。その当時、ちょうど「つゆひかり」という新しいお茶の品種が開発、登録されまして、お茶というのは大変品種登録されるまでが年数がかかる。40 年ほど前に交配した木から、茶業試験場の先生方の御苦労によって、何度となく選抜された末に 2001 年に「つゆひかり」が登録されたわけですが、その品種を導入したらどうかというお話がまとまりました。

現在、市内で栽培されている面積は５ヘクタールほどですが、今後も毎年１ヘクタールほど植栽されるじゃなかろうかと思っております。生産者、茶商、行政と一体になり、販路を拡大していかなければなりません。

それから昨年３月に初めてペットボトルの「つゆひかり」ペットボトルを販売することにこぎ着けまして、現在年間６万本ほどの販売を達成しております。

それと、毎年恒例になっておりますが、４月中旬に「つゆひかり」の初摘み体験、あらさわ公園を主会場といたしまして、あらさわ公園に大勢の方をお呼びいたしまして、今年は 47 名ほどでございましたが、遠くは埼玉県、あるいは静岡市、焼津市、浜松市と、多方面の方に参加していただき、にぎやかく催すことができました。

それから、「つゆひかり」カフェということを行っておりますが、今までは７月の２週間、

ないし20日間ほど開いておりますが、18の店舗、オートバイ屋さんとか、万年筆屋さんとか、そういった異業種の方と一緒に「つゆひかり」あるいはスイーツを提供して、より多くの方にお茶のファンになっていただこうということで企画しております。

それから、本年初の試みでありますが、「御前崎つゆひかり北海道上陸大作戦」と銘打ちまして、札幌の駅前にありますけれども、大丸デパートでのデモンストレーションを展開中であります。先月29日から今月の４日まで開催するということでございますが、本年は大変暑く、北海道も30度以上になった日が何日かありますが、冷茶が大変人気で、手ごたえを感じていると承っております。

私たちはこのように茶商さんと生産者、行政が一体となって消費拡大に努めています。県におかれましても、ぜひとも御前崎茶販路拡大を後押ししていただきますようお願いいたします。ありがとうございました。

＜発言者４＞

こんにちは、私は助産院を開業しております。私の助産院の三本柱を紹介いたします。一つ目は分娩についてです。助産院は３年前開院いたしました。それまでは総合病院で分娩の取り扱いをしなくなってからは、御前崎市に分娩できる施設はありませんでした。場所によっては車で片道40分以上かけて隣の市に行き、分娩せざるを得ない状況です。分娩場所、相談場所が遠いということで、御前崎市民は大きな負担と不安を持っていると思います。

そんな中の開院でしたので、「おっぱいが張って赤ちゃんに飲ませられない」「おむつかぶれの対処を教えてほしい」など、連日たくさんの相談があります。「助産院の存在はとても心強い」と、うれしい声をいただく反面、「もっと早くに助産院の存在を知りたかった」と言われることもあります。どのようにして市内のたくさんの方に助産院の存在をアピールするかというところが今の課題になっています。

助産院は主に一人の助産師が妊娠から産後まで一貫してケアします。より個別的なこまやかな指導が受けられるので、最近では初めて赤ちゃんを産む人でも出産を希望されることもあります。また初めて出産のときは不安で病院を選んだけど、二人目、三人目は家族とともに家庭的な雰囲気の中で出産したいと希望される方もいて、問い合わせは増えてきています。ですが、助産院の連携医療機関が私のところは焼津市立総合病院になります。助産院で出産したいけれど、何かあったときに搬送する病院が１時間以上かかる焼津市立

総合病院だと不安ということで、助産院で出産したいけれども断念するという方も、実は結構いらっしゃいます。

実はこの近くの病院にも幾つかお願いしましたが、医師不足ということで受け入れてもらうことができませんでした。きちんと病院で必要最低限の検診を受けていれば、近辺の病院がどこでも受け入れ先になってくれるようなシステムになれば、もっと助産院で出産したいという思いのある方も受け入れてあげることができるのではないかと思います。周りから支えられて幸せいっぱいに出産したお母さんは、その思い出はその後の育児を乗り越える力になります。「もう１回感動したい」「だからもう１回出産したい」、助産院で出産したお母さんから聞くうれしい言葉です。

二つ目の活動は、御前崎の母親の能力を生かす場づくりをしています。ここ御前崎では支援センターの行事があり、何か子育てのイベントがあるわけでもなく、子供連れで通える教室もありませんでした。ですが、助産院を訪れる母親の中には、子供がアレルギーだったため、アレルギー物質を含まない安心でおいしい食事やおやつのつくり方を勉強して、かなりの腕前の人がいたり、独身時代にパン教室に通って教師の資格まで取ったり、安全でおいしい野菜をつくりたいからと、ここ御前崎に移住してきた人がいたり、すばらしい技術や知識を持った母親たちがたくさんいました。

この知識をぜひ社会のために生かすべきだ、育児中も社会とつながることが大切だと感じ、年に一度、１日だけのハンドメイドのフリーマーケットを開催しています。その出来栄えはすばらしく、毎年大勢の家族連れでにぎわいます。企画から運営まで、すべて母親たちが行います。小さい子供を連れて、とても大変そうですが、子育て中にこのようなすばらしい力を発揮できる母親たちが、社会復帰してからもその勤務先で大きな戦力になる人材になれると思います。妊娠、出産、育児は女性が大きく成長できるすばらしいチャンスです。

実際にこのようなマーケットがきっかけになり、ときどきお料理教室を開催したり、いろんな勉強会を開いたりと、母親たちが母親たちのために行ういろんな催しが企画されています。どれもすばらしく、内容も充実したものですが、個人で行っているため、ほかの人が情報を得られないというような残念な面もあります。

助産院の宣伝も同じですが、宣伝しようにも、公的機関では個人の宣伝はできない、フリーマーケットなどは営利目的になるので場所を提供できないと、告知の面でも、場所の面でも課題はたくさんあり、活動を続けていくのに大変なところもたくさんあります。し

かし、ここ御前崎市では都会のようにいろんな民間のサービスがあるわけではありません。このような母親たちの自主的な活動はとても大切なことだと考えています。

ぜひこのような活動を小さなことでも結構です。場所を提供する、支援センターや市の検診など、母親たちが集まるときに告知する機会を与えてもらうなど、小さなことからでもサポートしてくださると、もっとたくさんの母親たちが活躍することができ、そのサービスを受ける母親も増え、ここ御前崎市での子育て世代が生き生きと輝いていくのではないかと思います。

最後三つ目は「いのちの授業」についてです。３年前より子供たちに命の大切さを伝えたいと、助産師が集まりグループを結成しました。出産を通じて、自分は世界にたった一つしかないすばらしい存在であることを伝えています。自分の命に感動する、自分を大切にする、それが友達や周りを大切にできることにつながり、いじめや自殺、児童虐待などの問題解決の糸口になると信じて活動しています。

ＰＴＡでロコミでこの活動が広がって、今年度は掛川市、御前崎市、牧之原市、遠くは焼津市などからも依頼があり、幼稚園の年長さんから中学生まで講演をしてきました。養護教諭にも興味を持っていただけて、先月模擬授業を行いました。ぜひ生徒に受けさせたい、心に響く内容だったというコメントのほかにも、依頼したいけれども、予算の関係で難しいと率直な意見もいただきました。

あした９月４日、「教科書にのせたい授業」で寺田恵子助産師の「いのちの授業」がテレビで放映されます。全国で助産師が行う「いのちの授業」は広がりを見せています。ぜひ専門家が学校に出向けるようなサポートをお願いしたいです。

出産する場所がない、入院できる小児科がない、そんな地域だからこそ、地域で活躍する助産師が必要だと考えています。残念ながら私の知るところでは、今私のほかに御前崎市内で地域で活動している助産師はいないように思います。もっと助産師の存在が周知され、必要とされることで、やってみたいという今働いていない助産師が活躍できる場が広がるのではないでしょうか。仲間が増えるといいなと思っております。ありがとうございました。

＜発言者３、発言者４に対する知事のコメント＞

最初の発言者１さん、発言者２さんのときもそうだったんですけれども、非常に前向きの発言が今発言者３さんと、それから発言者４さんからもお聞きできたと思います。言う

までもなく今静岡のお茶が厳しいということ、その中で昨年の正月に先ほどお話に出た掛川の病院の副院長をされていた鮫島先生と東北大学、必ずしも静岡県と関係のない方ですけれども、科学的に深蒸し茶が、こういう私のような肥満症とか更年期障害だとか、いろんなものに効くということで、それが「ためしてガッテン」で放送されて、そして掛川の深蒸し茶は、菊川が本当ならばその原産地だそうですけれども、掛川というのが一気に全部売れて、在庫が全部なくなるというぐらいまでいったその２カ月後に３．１１が襲いまして、そして１カ所でだけ、いわゆる規制値を上回るということが大きく報道されまして、その結果、静岡茶といえば敬遠するということになりまして、鹿児島にも大きく水をあけられると。

それまでにも追い上げをくらっていましたけれども、そういうことになって、そしてその風評、いわゆるうわさですね、事実でない、それによって人が動くという、これに戦わなくちゃならないということだったわけですけれども、私どもは検査をしっかりいたしまして、もう大丈夫だと。御承知のように、もう今年すべて大丈夫です。それでやっているということなんですが、にもかかわらず、こういう短期的に厳しい状況になっただけでなくて、中長期的にお茶の、特に静岡茶が前から追われているというのが事実です。そうした中、発言者３さんが実に「つゆひかり」というのを平成 17 年から会長を務められているということで、これは御前崎の「つゆひかり茶畑寿ぐ富士の霊峰」という歌もあるくらい、ブランドとして定着してまいりました。

牧之原の「望（のぞみ)」、そしてこちらの「つゆひかり」というのはブランド名としてできつつあります。しかしながら、この生産者がいかにいいお茶をつくっても、間に茶商がお入りになって、値段をお決めになるということが大きいですわね。ですから、これはこれとして本県で持っているこれまでの伝統でありますけれども、一方で北海道に乗り込んで冷茶を売るというのは、もちろん茶商もきっと御協力されてますけれども、恐らくそのつゆひかりの会も主体的になさっているんじゃないかと。ですから消費者がいるわけです。

日本でお茶を飲むということが健康寿命にいいということも、ついに科学的というか、これはいい意味でのうわさですけれども、静岡県は 219 の食材があると、御存じですか。７月２日号の『週刊ポスト』を読んだ人、これはなぜ静岡県が日本で一番健康寿命が高いのか、それを特集したんです。そしてその理由は静岡県は日本で一番たくさん食材が多い県だと。219 品目と書いてあります。そして農産物だけで 167、海産物入れて 219 ですね。

日本一です。だからバランスのいいものをとっているからだという。これが一つ。

もう一つの理由がお茶を飲むからだと。そして平均の日本人の一人当たりのお茶の摂取量の２倍が静岡県ですから。これが掛川茶の昨年のあの報告、テレビにおける宣伝といいますか、広報といいますか、この番組と合わさって、これが健康にいいということになってきているので、お茶を飲むといういろいろな追い風が吹いています。これまでの流通ルートとは違うものをやはり見つけなくちゃいかん。せっかく作られたものを、あとは工場に持っていって、茶商に任せて、“はい、さようなら”ということでは、もう済まないようになっていると思います。お客様がこちらに来られる。これから発言者３さんのところも、いろんな大きな全国組織されていますから、そこに直接持っていくとか、従来の流通ルートとあわせて、やはり自分たちで流通ルートを開拓していくことが大事だと思います。

新東名もそのうちの一つですね。ここにはもう３カ月で 1300 万人を超えました。１カ月で 593 万人です。１カ月の集客力としてはスカイツリーを抜いたわけです、スカイツリーは 581 万人ですから。御前崎の人口が３万人ちょっとでしょう。12 万人多かったんです。御前崎の全人口が４倍ぐらいたくさん行ったようなもんですよ。それくらいたくさんの人があの新東名に来られた。お茶を飲みに、お茶を買いに、いろいろな食材を楽しみに来られているわけです。

ですからここから御前崎からずっと 30 キロ行ったら新東名でしょう。空港を右に見て、さあっと行けばいいわけですよ。ちょっとあと３キロほど、新東名に入るところ、だらだらとしています。あそこ３キロ、一体国は何をしているのかということで今言っておりますので、すっと行くともうあっという間に新東名にも出られます。その他いろいろなチャンスを自らつくっていくと。相当発言者３さんはなさっておられるということで、もうひと踏ん張り。

大体二十歳のときには「つゆひかり」なんかなかったわけでしょう。芋とタバコだったんじゃないですか。その 40 年の間にここまできたということでございますので、ここでやっぱり新しいことを、その「やぶきた」がいいということで栽培するようになり、そして「つゆひかり」という新しいブランドをつくり、そして今、北は北海道、南は沖縄まで視野に入れることができます。沖縄にもお茶ができませんね。ですからそこに持っていけばいい。北海道もできません。持っていけばいい。ですから、そこには新しい市場が開けているはずで、そのためには空港を利用しなくちゃいかんということもございましょう。ですから、一人で行くとなかなかあれなので、友達と一緒に行くといろいろと情報もくれま

すから。

それから静岡県は茶どころだと言っていたらだめです。茶どころと言えば、狭山も茶どころだし、宇治も茶どころですし、鹿児島も新しく茶どころに伸ばしてきました。ここは茶どころじゃありません。茶の都です。「山は富士、お茶は静岡茶の都」と言うじゃないですか。五七五ですよね。「山は富士」、これは文字どおり、「お茶は静岡」、先ほど生産高で４割５分、つまり４割５分が生産高でこちら、流通量が６割ですから、文字どおり日本一なんです。

それから献上茶ですね、献上茶は今年は浜松、全県下で順番に献上して差し上げておりますが、これは静岡県の伝統です。最高のお茶を持っているんですよ。これの後は、作ったらもう当たり前だという、売れるのは当たり前だというこれまでの一時期の文化、これからはお客様第一で、消費者のことを考えるべき時期にきています。そして我々には情報を活用しないと、風評で惑わされるということもありますので、自ら生産者が消費者と結びつくようなそういう試みがこれからは求められるであろうということでございます。

大体こんなところに何で柿田川の水があるんだということですね。せっかくボトルをつくられたということで、「つゆひかり」のボトルって見たことないですよ、まだ。あっすみません、見たことがあります。今日なぜそれがないのか。柿田川の水も大したものです。これも「富士の根を幾歳潜る白雪の清き水湧く柿田川かな」、日本一の湧出を誇る。しかしこれは清水町のやつじゃないですか。何もこれがここにある必要は全くないというように思いますが、そうしたこういうちょっとした気遣いですね、こういうところでその新しいボトルを置くということをしていくのが当たり前だと思う。恐らくこれ県が置いたんだよ、きっと。

もう堂々とやればいいのです。こちらはその主体性をお手伝いするという立場ですから、お願いするというよりも、わからないんですかと、啓発していただくという、そういう態度で結構です。

そして発言者４さん、総合病院等々で産婦人科がどんどんと消えていくと。

ただし、ここの御前崎市は合計特殊出生率は低くありません。1.6 を超えています。1.7 に近い。これは女性が一生の間に何人お子様を産まれるかというその平均値なんですけど、日本全体では 1.4 を切ってます。静岡県では 1.44 人です。それよりはるかに高い。しかし２人、2.07 人ぐらいまでいかないことには人口は減ります。静岡県の人口は３年前は 380 万でした。そして２年ほど前に 377 万、376 万、375 万と減ってきて、今 374 万人台です。

ですから静岡県人口 370 万人という時期が、もう迫っております。

そうした中で妊娠をし、分娩をし、そして育てていくということが、いかに感動的であるかということを助産院を通してやっていこうと。もう助産院というよりも超えてますね、これは「助産学」みたいな、「助産学院」みたいなものですな。こうしたものが今のところ発言者４さんの助産院しかないということなので、先ほどの発言者２さんもそうでしたけれども、５家族で 12 人だと、リーダーが欲しい。10 坪の土地があれば、あるいはもう少し哲学を変えればというふうにおっしゃっていましたけれども、これは私どももそれを聞いたので一緒にやりますけれども、自らがリーダーでいらっしゃるので、そこがやっていくというのが一番力強いです。そしてその試みを我々がＰＲをして、より多くの人に知らせていくと。

ただ、こちらの核になっている人たちが壊れていくと具合が悪いので、ぜひお仲間を５人の御家族、こちらも何人とおっしゃったっけ。まだその数が少ないとのことでございますけれども、その数を増やしていくと、３人が５人、５人が７人になっていきますと、七五三の法則でずっとふえていきます。七五三の法則はちょっと別のときに言いますけれども、あるんですよ。増えていくんです。

ですからこれは非常にいいお話をこのお二人の女性から聞いているというふうに思いまして、力強く思いました。何とか 1.67 を 2.0 ぐらいになるように、どなたもお二人ぐらいは平均してですけれども、お子様を持っておられて、それが社会によって、たとえ重度障害者でもちょっとした小さな仕事があれば、その人たちにとっての生きがいになるような、また家族にとって喜びになるような、そうしたものができるというそういう芽が間違いなく今我々はここの目の前でお聞きしているというふうに思いまして、大変感じ入った次第でございます。ありがとうございました。

＜発言者５＞

私は男女共同参画推進市民会議の委員をしております。

私たち御前崎市は「きらり輝くしあわせづくり計画」と称し、男女が互いを思いやり、幸せを分かち合える社会を目指し、平成 19 年度に男女共同参画行動計画を策定、現在第二次行動計画に突入し、その実現に向けて推進中です。

しかし、そうはいっても男女共同参画というこの言葉、市民の皆様にはなかなか浸透せず、その啓発活動を模索しながら、講演会や体験型イベントを開催し、男女共同参画推進

市民会議委員７名、知恵を絞り合って活動しております。この会場に傍聴に来てくださっている皆様の中でも、もしこの「男女共同参画」という言葉を広報等で目にしました折には、だれでも参加できる楽しいイベントや講演会を随時開催しておりますので、性別、世代を問わず、奮って御参加をお願いしたく、この場を借りてＰＲさせていただきます。

さて、私は二十数年前の男女雇用機会均等法が制定されたころに社会人としてスタート、結婚、３人の子供の出産、育児を経て、その後社会復帰と、まさにこの法律が確立される狭間の中で人生の日々を過ごしてまいりました。それらの経験を踏まえ、今回この会に出席させていただくに当たり、男女共同参画のさまざまな分野の中から、子育てと女性の就労にスポットを当て、提案したいと考えました。

そこで現場の声を届けるべく、児童館や子育て支援センターに足を運び、運営管理者や、今現在働かないで子育てに専念している若いお母さんたちの生の声を聞いてまいりました。その中で感じたことは、少子化に歯止めがかからない現在の日本で、子育てに専念している女性というのは、２人以上の子供を持つ母親が圧倒的に多いことです。

そして彼女たちは口をそろえて、パートタイマーで働いて稼いでも、兄弟がいると保育費で消えてしまう。だから子供が小さい間は自分で子供を見て、子供が手のかからなくなる幼稚園、または小学校に上がるころになったら、ちゃんと働きたいと言うのです。それならば男女共同参画により、産前産後休暇や、育児休暇等の女性の就労環境が整っているのだから、育児をしながら働けばいいじゃないかとおっしゃるかもしれません。

しかし、利潤を追求する一般企業、特に企業全体の大多数を占めていると言われている中小企業では、限られた人員の中、産休は仕方がないにしても、３年間取得可能と言われている育児休業は、悲しいかな、現実的ではありません。

また育児は予測不可能です。小さな子供の病気や怪我による急な用事はつきもので、複数の子供を持つ親となれば、それは複数回に及びます。男女に限らず、仕事に責任を感じている人ほど、雇用主に急な休みを申し出ることは、心情的にとても心苦しいものです。またこれらを権利だと主張することは簡単ですが、そこに調和はなかなか生まれません。だから彼女たちはちゃんと働けるようになったら働きたいと言うのです。

育児に専念してきた女性たちが専業主婦で終わらないで、その時期が来たら働きたいと思うようになったのも、男女共同参画社会という意識改革の成果です。それに加え、彼女たちは将来子供にかかる多額な養育費を思い、子供のために自分が社会復帰をして働く必要性をとても強く感じているのです。

そこで私が提案したいのが、そんな彼女たちの社会復帰のための環境整備です。女性の初産平均年齢が 28 歳という統計から、複数の子供を持つ母親が社会復帰をする年齢は 35 歳前後になると予測されます。しかし、求人募集条件には、表示こそされていないものの、実は年齢制限があり、職種の選択肢が激減してしまうのが現実です。よって、雇用主の意識改革を初め、女性の社会復帰の受け皿という視点で、行政でも男女共同参画社会をさらに展開していただけたらと提案いたします。

最後に、今回私が訪問した子育て支援関連の施設が、育児に積極的に参加している父親や、育児に悩みを持つ母親にとっても、また親が共働きの子供たちにとっても、コミュニティの場としてとても大きな役割を果たしていましたことを御報告申し上げ、結びといたします。ありがとうございました。

＜発言者６＞

私は社団法人御前崎スマイルプロジェクト理事長、ＮＰＯ法人のプロウィンドサーファー協会理事長をやらさせていただいております。

ここでスマイルプロジェクトを簡単に説明させていただきます。地元御前崎を活性化したい地元の起業家とプロウィンドサーファーをはじめ、マリンスポーツ愛好者が集まり、海を軸に沿岸の安全・安心を守り、青少年の育成、環境保全、観光促進を行う社団法人です。

私は 25 年前に名古屋からウィンドサーフィンの聖地御前崎にウィンドサーフィンのプロになるために移り住んできました。私が移り住んだときは、白砂青松と言われていたころで、海岸は砂であふれ、昔ながらの海岸でありました。また「御前崎ロングビーチ」と呼ばれ、海に向かって砂浜が長く続いていました。

ですが、この 20 年の間に砂浜は 100 メーター近く減少し、今では砂利浜と岩のビーチになった状態です。また海岸線を走る県道は、砂浜がなくなったために直接波が当たり、御存じのとおり、滑落を起こしてしまいました。さらに砂浜が減少していく状態が続くと、間違いなく近いうちに滑落部分の近辺が同じ状態になり危険な状態にあります。また砂浜がなくなることで、海の生態環境が変わり、魚が卵を産めない、ウミガメが卵を産めない状況が起きてきています。

そして御前崎ロングビーチは年間 10 万以上のマリンスポーツ愛好者、観光客が訪れています。御前崎はマリンスポーツ愛好者から聖地と呼ばれ、世界的にも知られています。

そこで具体的な提案があります。御前崎は砂がたまって困っている場所があります。それは御前崎マリンパークです。そこは毎年６月に 9000 立米を浚渫し、その横にあるビーチに戻す作業をしています。浚渫量も足らなく、横のビーチに戻すだけの作業では、海水浴場も厳しくなるほど砂がたまり、このままではなくなってしまうでしょう。

２年前から、その浚渫した砂を 200 立米、ロングビーチ、太平洋側の方に運んでいただいているんですが、その量では全くロングビーチの砂の問題は解決しません。応急手当てとなりますが、来年度の浚渫量を増やし、砂をロングビーチ、太平洋側に運んでいただきたいと思います。

また静岡空港、牧之原インターも整備され、さまざまな人が訪れ、自然環境の目安となる砂浜の問題は、この御前崎、静岡県にとって、私は重要だと思っています。そして昔あった御前崎の一番長い砂浜をこの地域の子供たちに残していきたいと切に願っています。この砂の問題は、天竜川の護岸工事などが影響していると、ある専門家が言っております。県としてぜひこの問題に取り組んでいただきたいのですが、お考えをお願いいたします。

＜発言者５、発言者６に対する知事のコメント＞

まず発言者５さんから男女共同参画の重要性についてお話しいただきまして、どうもありがとうございました。発言者５さんも３人のお子様、そして先ほど発言者４さんも３人、そして発言者２さんはお２人ということで、さすがですね。しっかりと家庭といろんなボランティア活動、あるいはお仕事を両立させている人がいるということです。

ただ、男女共同参画というのは、言うは易く、なかなか行うは難いところがございます。県庁を御覧になったら、もう皆むさ苦しい男どもがいる世界になって、御前崎はどうですかね、市役所は。それで男性がたくさん来ているような職場だったわけです。ですからこれをやっぱり変えないといけないということで、もともとは男女共同参画です。そうですね、つい 100 年ほど前以前、江戸時代を考えてくださいませ。200 年以上前ですけれども、農業も一緒でしょう、それから商売やっていても一緒ですよね。おかみさんがちゃんと仕事していますから。ですから仕事場と、それから家庭とは離れていなかったと思います。ですからお父さんの背中、お母さんを常に見ながら仕事をしながら家庭、そしてそれが皆周り一緒ですから。ところが、そうですね、大正時代からだんだんサラリーマンというのが出てきまして、特に昭和になってひどくなって、御長男は本来家を継ぐはずなのに、家を出て会社に勤めるのが何となくハイカラになってきたということでございます。

そうした中で、男の人が出て、女の人はなるべく早く結婚するということになって、男中心の社会になりました。しかしこれは昔からあったことじゃないですよ。だから本来男女共同参画です。国づくりも、いざなみといざなぎで一緒にやったわけですから、いざなぎというのは男です。いざなみというのは女のプリンセスですね。二人で国をつくったと古事記には出てきます。

これはもうヨーロッパなんかは、神様を「Ｈｅ」というんですよ。「Ｔｈｅ　Ｇｏｄ」、代名詞で「Ｈｅ」、男でしょう。最初は男をつくるんですよ。一人じゃ寂しかろうというので、肋骨から女の人をつくったと書いてあるんです。だからもう男中心ですが、日本は男女共同参画で国づくりも始まっているし、これから元に戻すということです。

ただ、今おっしゃったように、残念ながら今静岡県には 20 万ほどの事業所がございます。圧倒的多数は中小企業です。そこでもやっぱりサラリーマン化していますね。もっと小さくなればいわゆる家族産業として男女共同参画と言わなくてもそうなっていると思いますけれども、やっぱりその事業主が男である、そういう感覚でやっているというところがあるので、意識改革しなくちゃいけない。

特に役所などは、今別に力を使うというよりも事務の仕事ですから一緒に仕事ができるということですので、意図的にやっていく必要があると。御前崎は先陣を、きょうは副市長さんが来ておられるので、副市長は女性でなくちゃならないというわけじゃないですけれども、うちは知事公室長というのが初めて女性なんです。きょう来ているかな。来てないということなんですが、今まで全部男だったんですね。秘書のトップというか、全体を取り仕切る役割なんですけれども、女性です。その方をお入れして雰囲気が変わりました。変わるんです。むさ苦しくなくなるんです。華やかになってくる、明るくなってくる、これはとても大事なことで、やはり 20 万の事業所の中で、思い切り女性を登用するということをしていく必要があると思います。

そしてさらに言えば、必ずそうなると思います。なぜかというと、皆子供が少なくなって大学に行かせるようになりました。そして、あるいはそれなりの資格を取るようになった。もう平成に入ってから、大学への進学率は男を女が抜いたんです。ですからそのときに 18 だった子は、今平成 24 年ですから 24 を足すと 42 歳になっています。だから 42 歳以下のどの人をとっても学歴変わらないです。

長いこと学歴社会で、大学に行っていい会社にという、これは男の子の世界で、女の子は大学なんかに行ったら嫁に行けないというふうに殺し文句で大学に行かせられなかった

のが、「弟に行かして、どうして私を行かせないの」というお姉ちゃんのそういう強い希望をお父さんもお母さんもかなえていくことが多くなりまして、もう 42 歳以下だと変わらない。あと 10 年たったら 52 歳以下、20 年たつと 62 歳以下はすべて学歴が変わらない。そして 60 前後になると、もうトップになりますから、そこのところでその辺の今の 42 歳以下の人たちで、ずっと同じように男女共学でやってきた人ですから、何で私があの男の子よりも下に立たなくちゃならないのという意識を持っているのが 42 歳未満です。

ここにも若い方がいらっしゃいますが、あなたは男より劣っていると思ってないでしょう。そういうものなんです。ですから、すごく女性もしっかりしている。これが 40 前後以下の感覚です。それがもう 10 年たつと 50 歳以下になります。ですからそれを先取りすることが時代を先んじて、そういう社会を先に実現するということになるので、古い考え方を持ってらっしゃるのは余り古くないと、中途半端に古いだけで、本当に古く考えれば、これは共に働くのが当たり前だということになるはずだと。

ただ、今まだ女性は３人目のお子様を迎えるとなると、やっぱり大変ですよね。35 前後で何とか、しかし 40～50 になるまで子供は自立しませんから、いかにして女性を社会に入れていくか、これは知恵の絞りどころというか出しどころというふうに思っております。ですからそれぞれできるところからやっていくということだと存じますけれども、発言者５さんが「意識改革」ということを何度も言われました。やはりこのコミュニティでそういうふうにやっていくという共通の認識を持つと早いと思いますね。

それから発言者６さんですが、19 歳から 25 年とおっしゃいましたか、だから今 44 歳ですか。本当に真っ黒に日焼けされて、たくましい限りで、御前崎に来られた人生の方が、名古屋ですか、そこにいらしたときより長くなったということで、しかも白砂青松のロングビーチに惹かれたということで、そのロングビーチのこれまでの越し方を見てこられて、これを何とか残したいと。それを日本の財産として残さないといかんと。特にサーファーというのは、これは日本全国ネットワークで 20 万のその代表者でいらっしゃいますので、この思いは非常に強いと思います。それは 20 万人の人たちと同じ思いだと思います。

そして白砂青松というのは日本の原風景ですから、ですから白砂青松の物語で羽衣の松のところ、あそこも砂利じゃないですか。テトラポットと砂利ですね。本当に悲しい話です。つまりこれは日本全体の問題だと。しかし解決方法がある。例えばマリンパークでは、9000 立方メートルですか、一部出ていると、そこから持ってくればいいという、ある程度の規模を持ってこないと回復ができないということで、具体的な数字も挙げられておられ

ましたので、私どもは天竜川が今養浜、浜を養う、あるいは離岸工事とか、いろいろやって、長いところでは90メートルぐらいまで戻したところもありますが、全体としてはなかなか焼け石に水のところがございまして、あるいはその砂をこちらに流すためのそういう装置をつくったり、本当に苦労しています。

全体としてこれがもうダムや何かによって海浜が狭まっているというのは、なかなか止めることができないという中での知恵なので、個別にどこかモデルケースをつくればうまくいくかもしれぬとも思っていますが、いずれにしましても、美しい海岸をつくり上げるために、余っている砂もあるところがあります。天竜川も、あるいは大井川も、あるいは本県の大河川、大体浚渫をしなくちゃならないぐらいに砂がたまっております。一方、ダムの向こう側には砂がたまっていると。

ですからその按配をどうするかということで、この自然というものを相手にする技術というのは、よほどに高い技術力を持たなくちゃいけませんが、日本より高い技術力を持っているところはありません。ですから、我々はダムのよさとダムの限界を両方知っている、そういう経験を持っています。ですからこれは現場を知っている方の意見を入れて、差し当たってせっかくこの日本ウィンドサーファー協会の理事長を務められて、しかもここがウィンドサーフィンの聖地ですから、この聖地だけはサーファーの熱い思いを何とか形にするということで、特段の力を注ぐようにしたいと思います。

＜発言者３＞

先ほど私が質問いたしました鮫島先生の国からの補助がないということで、地元に何とかしてくれんかというお話を伺ったんですが、そういったことで県としてのお考えはあるでしょうか。

＜発言者３に対する知事のコメント＞

鮫島先生が東北大学の先生と御一緒に、コホート調査というふうに専門的には言うそうですけれども、たくさんの方々に長い期間、一定の生活の態度を守っていただくと。皆さん、番組御覧になった方は御存じのように、全然何を飲んでいるかわからない、お茶の色をしているけどお茶ではないと。それがどのような効果があるかということを、お茶を実際に飲んでいる人と飲んでない人で定期的に数値を確かめていくんですね。そうすると、悪い数値が減らない、それはお茶を飲んでない人。悪い数字がどんどんよくなっていく、

お茶を飲んでいる人ということで、これはお茶に効能があるということで、そしてその効能の中身が何かということで、カテキンだ、何とかだというふうにして確かめていく、こういう調査なわけです。

このためには、実は多くの市民の方々の、１人や２人というわけにいきませんので、多くの方々の御協力と、そしてそういう研究者が要るということで、最低 10 万人ぐらいの人たちを確かめなくちゃいけないということになりまして、それで私の方から媒介になりまして、研究費を配分するトップ、科学技術会議というんですけれども、そこに持っていきました。残念ながらけられたんですね。

しかしながら、その科学技術会議のナンバー２だった方が本庶佑という先生です。聞いたことはないでしょう。コッホという結核菌とか、コレラ菌を発見した人がいますが、このコッホというのはドイツの医学者なんですが、コッホ賞というのが西ドイツの最高の賞ですが、それを取られた方がその本庶佑という先生です、京都大学の。その人が静岡県の県立大学の理事長先生ですよ。ものすごく理解があるわけです。

ですから、これからこういう研究の大切さというのが広まってくると存じます。ですからいましばらく時間をいただきたいと。１回これは大変お金と時間と、それから研究方法と、従来掛川でなさったものをさらに広くするにはもっと、10 億単位のお金がかかるわけですね。ですからこれは政府の方が研究補助をするについても、優先順位の中で、あの研究が終わった後は高いものではなかったんです。そんなことで今頓挫しておりますけれども、私はこれは非常に重要な研究だと思っておりまして、もっと徹底してやりたいというふうに思っております。

そうした中で医学の日本における最高権威が、この４月に本県に県立大学の理事長として、県立大学二つあります。一つは浜松にございます静岡文化芸術大学、この理事長が有馬朗人という先生ですね。元の東京大学の総長だとか、文部科学大臣を務められて、原子核の世界的権威ですが、俳句もつくられる方です。そのもう一つの県立大学が静岡市にありまして、これは学長先生が木苗先生という栄養とかワサビとか薬学の日本における大変有能な一線の一流の学者ですが、その学長先生ともう一人理事長が本庶先生です。

ちなみに静岡文化芸術大学の学長先生は熊倉功夫という先生で、お茶の文化にかけては日本のトップです。お茶の文化は食文化と関わっておりますので、日本食を世界にアピールするというのを、国はフランス料理とかメキシコ料理が世界遺産に登録されたので、韓国はキムチを届けたいと言っているんですね。キムチを届けるなら日本食も届ける。日本

食というのはどういう文化かということをある委員にお願いしようということになって、その委員の先生の中でトップになったのが熊倉先生です。その先生がうちの大学にいらっしゃる。

ですから、大変優れた先生方がいらっしゃいますので、そうした日本のトップクラスの学者に本県を通じて日本のために働いていただくと。その中には今おっしゃった掛川での深蒸し茶に関わる調査ですね、これもっと広くお茶一般についてやっていくと。もしそういうことで御前崎の方は御協力くださいと言ったときには、特に「つゆひかり」の会の御家族には御協力を賜りたいとよろしくお願いします。

＜発言者３＞

県知事さんは、原子力委員会と言って青森県の県知事が会長をされているものだそうですが、青森県知事が原発ありきというようなことで発言をされたことによって、その会から脱会されるお話を伺っております。また、御前崎港にモンゴルから石炭を入れて火力発電所をつくるということになりますと、脱原発の方向に向かっていようかと思います。

私たち茶生産農家は今、先ほどお話ししたように、茶づくりにあえいでいる状態です。跡継ぎがない人とか、思うように茶畑の管理ができない、これから茶畑をどうしようかと、そういった方が大勢おります。今後茶畑を借りてくれる人は余りありません。そういった中で茶畑が放任される状態は目に見えています。

そういった中で、ソーラーシステムを何とか助成していただいて建設して、老後というか、茶づくりを放棄された方の収入源にして、茶全体を減らしていって、茶価の安定につなげるというような方法を私はしょっちゅう考えたことがありますが、途方もない考えかもしれませんが、県知事さんのお考えをお伺いしたいと思います。

＜発言者３に対する知事のコメント＞

今細野環境大臣が中心になられて、日本の原発の依存度をどうするかということで、北から南まで０％、15％、20％以上という中で選んでいただくと、またそれについて議論をしていただくというそういうお話がありますね。この中で０％にしてほしいという人が70％を占めているということは、もう報道されているとおりです。

それからまた先ほど青森県の知事さんの話が出ましたけれども、これは青森県の知事さんの話というにもまして、全国知事会というのがあります。その全国知事会の中でいろい

ろな分科会のようなものがあるわけですけれども、そうした中で原発が立地している県のそういう委員会もあるわけですね。

そうした中で意見をまとめようということになるわけですが、青森県というのは、東北の一番北で、東北電力株式会社のいわば管轄の中にあるわけです。そしてそういう電力会社というのは北海道、それから東北、あるいは東電、こちらの中電とか関西電力とか９つあります。実は 10 あるんですけど、原発を持っている電力会社は９つです。沖縄の電力会社は持っていません。

そしてそれぞれの依存度が違うでしょう。本県の場合は 10%ですね。中部電力は平均すると 10%ぐらいです。そして 2009 年、今からまだ３．１１が起きる前の依存でいきますと、関西電力、あの大飯原発で非常に話題になりましたが 54%ですよ。半分以上が原発に依存していると。四国電力も、案外お気づきにならないけれども、原発依存度が５割以上なんです。九州電力も５割以上なんですよ。東京電力というのは、この原発の事故が起こるまでは３割依存していたんです。そして中国電力というのは２割ぐらいです。東北電力は３割前後だと思いますけれども、うちが一番低いんですね。仮に 15%になったとしたら、もうでき上がっているんですよ。ですからそれぞれの事情がありますでしょう。

じゃ今回東電が値上げをすると言いました。だけどほかの電力会社はそれに従いましたか。従いません。つまり本県が１割余りを依存しているということは、別に国から命令されたわけじゃなくて、中部電力株式会社が主体的にお決めになって１割ほどなんですね。関西電力の場合は、関西電力のこれまでの指導者がお決めになって５割以上依存されているわけです。

ですからそれぞれ皆独立した会社ですから、それが日本一律で何%にしなさいといったところで、今度はそれぞれの独立した民間会社が調整をするといったって大変な仕事です。だから私どもはエネルギーの地産地消ということを言っておりますので、自分たちのエネルギーは自分たちで賄おうということでございます。

さて、この御前崎市に浜岡原発があると。浜岡原発は昨年の５月 14 日に全面停止しました。危険だからと言われる。そして今 4400 人の人が毎日働いております。夜も働いています。この間フィリピン海で地震がございました。そのときに夜でしたから皆引き上げたわけです。つまり夜に働いていたんですね、皆さん御存じのとおりです。そういう御前崎には 4400 人の人が働いているということは、電気を使っているということです、毎日。エレベーターがあり、電気があり、事務所があり、コンピューターがあり、電話があり、もの

すごい電力を使っております。

ところがここに高圧電線が走っていますけれども、これは本来送るためのものでしょう。全部送ろうと思ったら 360 万キロワット送れるんですよ。これを全然使わないで、今入れているばっかりです。電力会社の仕事は何ですか、電力を使うことではありません。電力を供給することです。供給どころか、今消費していると。おかしいでしょうと。どういうふうに電力の供給をこの 360 万キロワットの送電線を活用してなさいますかと言ったら、ともかく原発の安全性を確保するためだと。

だけど原発というのは供給の一つの方法でしかないと。水力も持っているじゃないですか、火力も持っているじゃありませんか。清水には今度中部電力最大の 8000 キロワットのメガソーラーをつくるとおっしゃっているじゃないですか。いろいろな方法をつくるということでしょうと。

御前崎は本県下でも最も日照時間に恵まれたところです。1.6 キロの塀の上にソーラーパネルをつくるだけでも、そのエネルギーを自分たちの生活に、仕事に使うということすら考えないんですかと。丘の上に非常用の電源をつくると。丘の上にソーラーパネルを置くということをどうして考えないんですかと。そういうことですね。

それから、その御前崎は立派な港で、これは日本に重要港湾というのが 100 近くあったんです。100 近くあると、どうしても政府のお金が分散するので、その中で重点的にこの港を育てようというのを選ぶということをお決めになりまして、それで大変な競争があったんですが、御前崎はそれに選ばれたんです。重点港湾なわけです。そしてクレーンも二つ新品にいたしました。そしてこれから伸びていく、しかも道路もできました。大変いいところなわけです。悲観するばかりじゃだめです。

だからどういうふうにそれを活用するか。そうすると、例えば今モンゴルの話が出ましたが、モンゴルは石炭が 60 億トン、70 億トンという埋蔵量がある。ただ運ぶすべがない。せっかくあるんだけれども、その火力発電をする技術がない。火力発電の最大のものはどこが持っているかというと、中部電力が碧南に持っていると、その技術は最高だと。技術と石炭を交換させてくれないかと、物々交換ですね。じゃ私が仲介をしてあげましょう。その仲介がうまくいって、もう石炭は全部静岡県にやるとまで大臣から言われた。私は要らないと言わない、わかりました、いただきましょう、仲介すればいいんですから、静岡県で。

それで、中部電力は今あそこをどうするかということで、ともかく安全を確保するため

だけの仕事をされているけれども、あわせて 100 ヘクタール以上もあるんですから、いろいろな方法を考えるというのが知恵でしょうということで、例えばプルトニウムという非常に困った物質がございます。これは核兵器の材料になるもので、これを我々はたくさん持っているんですよ。これを処理するというのを約束しているんです、国際的に。それを今処理方法が決まってない。

しかし処理する方法がないかというと、法律にのっとってやっていくと、トリウムという別のウランとは違う物質を使いますとプルトニウムを処理していけると。あるいは使用済み核燃料が１万体近くございますけれども、これを例えば浜松にホトニクスという会社があります。レーザーで全部潰すことができる、そういう技術まで持っているんですよ。そういうことを研究するというようやく重い腰を上げていただいた。立派なものです。だから前向きに攻める必要があると。

さて、こちらでお茶、単価が下がっているので、お茶の生産量を落とせば単価が上がるんじゃないかと、これは一つの考え方ですね。しかしお茶の消費量は世界全体では伸びています。特に緑茶に対する消費量が伸びています。ですから攻める方法が私はあるはずだというふうに思っておりまして、そしてそれは今まではある程度は輸出していましたけれども、基本的に国内の消費に依存していたわけです。しかし国内の消費も新しい需要を開拓しない限り伸びません。それはやはり先ほどの健康寿命とか、あるいはお茶をいろいろな加工してつくるとか、紅茶にするとか、いろいろな方法がありますので、まだ私はその価格を目安にして生産量を減らしていくという方法もあると思いますけれども、今あるものをよりよく、いいものをつくっているわけですから、これを野卑な言葉で言えば売り込んでいくという方法があるはずだということで、これは県を挙げて取り組んでおります。

ですから「つゆひかり」というのは、もうブランドとしてそれなりに知られておりますので、これをさらに売り出していくという方法を一緒に考えていきましょう。ですから後継者がないというのは、漁業でもそうです、森林でもそうです、農業でもそうです。しかし今どうですか、例えば沼津の新東名のＰＡ、ＳＡのところ、物が足りない、人が足りないと言っているじゃありませんか。何の物ですか。食材です。あるいは森町はどうですか、もうそこに市ができつつあります、森町のＰＡですね。

そういう食の安全ということで、今は個々の価格が上がって、食料価格全体が上がりつつあります。そうした中で相対的に農業というのができるんじゃないかと。農業も土をいじるということだけ考えていたのが、例えばアメーラトマトの工場を見に行かれれば、土

なんかありませんよ。コンクリートが敷いてあります。温度管理、湿度管理、光の管理でつくっているわけです。「植物工場」という言い方をしますけれども、いろいろに日本の自然がつくり上げるいろいろな生産物、農産物、こうしたものはもともと毎日要るものですから、しかも季節ごとに出てくるものが違ってきますので、しかもそれを我々は日本一いろんな食材を持ってますから、活用する方法はまだあると。

従来のやり方のままだと尻つぼみになるけれども、新しいやり口を考える。我々は何か課題があったときに、できない理由を挙げるのは簡単なんです、こうこうこういう理由でと。一番得意なのが県庁の役人ですよ。こういう理由でできません、こういう理由でできません、こういう先例がありませんと、100 ぐらい挙げる。だけどできる方法を考えると。いかにしてやるかという方法を。

だから私は今発言者３さんの方から、ちょっと後ろ向きでしたので、私は今はそれを前向きに変えるという姿勢を持っているので、今はある意味で転機かもしれません。沈むか、上向くか、何としてでも発言者３さんは、会長さんでいらっしゃいますので、会長さんの意気込みが下向きになると、すごく会員に響きますから、これは明るいああいう顔のように、ずっといつも、問題はあることは知ってましても、大丈夫だということで前に進むということで、二人三脚で、よろしくお願いします。

＜傍聴者１＞

新聞報道で南海トラフの巨大地震など報道される中、この地域での津波については 19 メートルと予測されてます。この間の新聞の報道の対策として、「住民の高台への移転」「土地の利用の計画の再設定」とか書いてありました。私の住むところは海抜６メートルのところにあり、前は海、後ろは山といって、もしその巨大地震があった場合については、到底逃げられるような場所ではありません。家族でいろいろ相談して高台移転ということで考えていましたけど、実際私たちの土地は高台にありますが、青地ということで、すぐ市役所の方に行きましたら、そこでは建てられないということで回答をもらっています。

実際今後、築 50 年という家の中で地震に耐えられるかというのもとても無理だと思いますので、ぜひ高台移転というのを今後県の方でどう考えているのか。青地というので、それこそ今出たお茶畑であり、国が指定している農産物を保護するという意味でも、畑ということを大切にされていることはわかりますけど、明日起こるかもしれない地震に対して、家族の安全とか、地域の安全を考える中で、ぜひ回答をお願いしたいと思います。

＜傍聴者２＞

今の質問に関連しています。実は今回の津波想定高が国から出されまして、県の方も土地利用計画の見直しが入ると思うんですけれども、まさに先ほどの傍聴者１さんは津波、知事が見られた避難タワーの近くに住まわれている方なんです。あの避難タワーですね。昨年実は傍聴者１さんのほかにも、あの避難タワーの近くの方が３．１１の津波を見られて、高台にある自分の農地に移転を申請した。同じように農振法の関係で、その申請が却下されてしまったんですね。これは御前崎市だけの問題ではなくて、牧之原市でも起こっています。

それで、ぜひ今度の土地利用計画の中で県の方にお願いしたいのは、海岸線から直線４キロメーター以内で、その市町の想定津波高よりも高い農地については、住宅建設に限り農振法の適用を除外するというふうな方針をぜひ今後の土地利用計画の中に取り入れていただきたいと思います。いわば憲法で保障されている生存権の否定になっているわけですよね。

ですので、ぜひ今度の土地利用計画の中で、私が先ほど言いましたことを入れていただければ、はっきり言いましてお金もかかりません。もう皆さん自分で移転したいと言っているわけですから、県の方でお金を出す必要もございませんし、市の方で補助金もそんなに要らないと思うので、ぜひこの法改正というか、事業計画の見直しをしていただきたいというふうに思っています。

＜傍聴者３＞

私は非常に浜岡原発の近くにおりますので、まず何よりも今力を注ぐことは安全対策であると思うんです。

８月の 17 日から 20 日まで、私は長春におりました。そこから先の 135 キロ東の田舎町に用事があったので行ったんですが、そのときにいろいろ考えましたけれども、安全ということです。非常に中国、今後の原子力開発は世界第一になるという目的を立ててやっておりますが、私が一番思ったのは技術的なこと、技術、それから運用技術、そして安全意識ということです。

私は観光旅行で行ったわけではないし、いいところだけ見せていただくような視察に行ったものでもありません。全く個人で行きました、国がやってくれないので。この三つの

点で私は非常に考えるんですけれども、日本の技術というのは世界トップレベルだと。耐震技術というのはトップ、現在その日本の企業だけで原子力の発電所ができるというそういうことを聞いております。そうだろうと思うんです。

先ほどちょっと触れられましたけど、次世代原発を含めてトリウムですけれども、日本の国民生活を守るには一国だけではできないわけですね、現在も。なので日本はもっと技術開発をして、その技術供与をすることも一つ我々を守ることじゃないかと思います。

＜傍聴者１、傍聴者２、傍聴者３に対する知事のコメント＞

傍聴者１さんと傍聴者２さんの御発言は非常に身近なことで、しかも共通していることですね。本県の海岸 505 キロのうち 280 キロぐらいのところには工場があったり家があったりするということで、従来の津波の想定につきましては、250 キロ分ぐらいがもう防潮堤ができているんですね。

残念ながら、しかし今年の３月 31 日にすさまじい、いわゆる 1000 年に１回起こるそういう津波における想定高というのが出ました。10 メートル以下のところは４カ所しかない。全部で 21 市町 23 地区で 10 メートル以下のところは、何と熱海と伊東と、あとどこでしたかね、吉田町と富士だったか。今度は新しく 10 メートルメッシュのやつが出ましたけど、10 メートル以下のところが三つ、全部 10 メートル以上と。下田にあっては 33 メートルと、こちらは 21 メートルがやや緩和される形で 19 メートルと。しかしこれも巨大な高さです。

それで従来の三次想定でも 10 メートル以上のものが来るだろうと言われていたのがあります。それ沼津の内浦重須地区というところですが、行かれたことございますか。私はすぐに行ってきましてですね、というのは３．１１以後、重須の方たちが大体 100 軒ぐらいあるんですよ。で、８割以上の人たちが、上に 45 メートルの高台がありまして、そこミカン畑になっているんです。70 ヘクタールぐらいあるんですよ。７ヘクタールぐらいあれば十分に全部のまちがそこに移れるので、それで自主的にお決めになった。それを国に申請される、あるいは市に相談されたら、これはできない相談だと。なぜかというと、別にまだ津波が来たわけではない。そして従来から危険だと言われているわけじゃないと。それは私はおかしいと思って、それがわかったので行ってみたんですよ。

そしたら高台の上に中学校がありまして、先生が気づかれて、全校生徒が出てきて、校長先生も出てこられて、来た理由を言いましたところ、「ここはひょっとして大きな津波が来たときには、お家が流されるかもしれないと心配して来ました」と。

そしたら真剣になりまして、皆さんは中学生ですよ、110 名ぐらいの全校生徒が集まってくれまして、先生方も来られて、そうすると３分の２の子が「高台に移りたい」と。そして残り３分の１のうち半分くらいの子は「わからない」と、また半分くらいの子は「移らなくていいと思う」と。それは恐らく少し山側のところと海側と、あるいはお家の事情で違うんでしょう。だけど、地元の意向は子供たちまで同じなんですよ。

それで、これはおかしいということで、上は農地ですよね。そしてそういう集団移転は認めないとかと。それで掛け合いまして、予防的な集団移転ということができないかと。それで少しずつ考え方が変わってきたわけです。

それから実は３．１１が起こった後、復興計画というのが国を挙げて議論されまして、結論は高台移転しかないんですよ。もう津波はすべて破壊しますので方法がありません、上に行く以外。それで上に行くということを決めて、33 もの復興特区構想を出したんです。今おっしゃった農地制度、あるいは市街化調整区域、あるいは保安林がありますと、こうしたものを全部解除して、企業が出てきやすくする、あるいは用地の取得をしやすくする等々決めた。ところが全然行けないんです。行かないんですよ、今でも。

どうしてかというと、何もないから。三陸はすぐ陸が海に迫ってますでしょう。上は何もないんですよ。道もない、家を移したところで学校はない、買い物するところがない、病院がない、職場がない、だから移れないと。

ところがうちは新東名ができましたでしょう。だからそれはまずインフラがありますよと。そして予防的に防災で、その 33 のうち 22 は使えると。だから本県の場合には東海・東南海・南海、あるいは南海トラフで巨大地震が起こったときにはやられちゃうので、予防的に移さないと襲われてからじゃ遅いと。ようやく政府が重い腰を上げつつあります。

ですからこれは今傍聴者１さんとか傍聴者２さんだけの問題ではなくて、そういう沿岸地域に住まわれている、本県で言うと 280 キロのところにいらっしゃる方、全員が考えていることです。ですからこれはもう生存権と言われましたが、まことにそのとおりです。襲われてから移るというふうに、後からいろんな特区構想を設けるじゃ遅いと。ですから具体的な御提言もなさいましたけれども、２ヘクタールとか４ヘクタールとか以下ですと、それぞれの市町である程度できます。で、私の権限でできるところも、大きさによってはできるところがございます。

しかし、それが町全体のことを考えなくちゃいかんので、そこのところは、今日は副市長さんも県会議員の藪田先生もここにおられますので、その問題はよく御承知でございま

すので、こちらの方向に一緒に進んでいきましょう。これやらないといけない。まずは政府の方でそれを出された以上、私どもとしては、まずは人々が安全なところに移りたいとおっしゃっているその気持ちを形にしないといけないというのは、もう県下全体を預かっている私もそのつもりで、今いわゆる「162 キロの内陸フロンティア」というようなことを言っていますが、これは防災のためにやっているんです。全体そういうふうにいくと、そうすると個別の問題もその哲学の中で一緒にいけると。一つだけの問題を取り上げると、制度上のいろいろなことを言われますので、県全体として安全な方向にいくと、それは高台の方向に向かう。

ただし沿岸地域、ここですと御前崎の港もあるし、漁港もあるし、そうしたところで、あるいはサーフィンする人もいるし、そうした施設が要ります。だから家族が少なくとも津波が来たときに家族は上の方にいるとか、保育園は上にあるというふうになると安心でしょう。ですからその安心感を整えるためにも、何もこちらを遺棄するのではありません。危険を減らすという、その知恵を絞るべき時が来ていると。住まいと働き場所を変えるとか、そういういろいろな方法があると思うので、これを御前崎あたり、先ほど私、津波避難タワーのことを言いましたけれども、私ならあれ作らないですね、あそこに。公民館を上に移しますよ。上に行けるための階段をつくるとか、多分私の言っていることは間違っていると思います。だけど素人目で見て恐いと思ったときには、そういうのがあるかもしれない。ましてや住んでいる人だというふうに思いますので、やっぱりこれ住民力を上げてやるべきときです。

また浜岡、安全性に関しては、今傍聴者３さんが、おっしゃって、実は恐いから止めろ。止めろと言っても、そこにいわゆる崩壊熱というのを出します。これ例えば今津波が襲ったとします。そして全電源が失われたとします。崩壊熱出しているでしょう。動いていませんよ。だけど主要なものが止まって、そこに冷やされているんです。海水がどんどん入ってきているわけです。それが来なくなったと。そして動かなくなったと。そうするとどんどん、どんどんと水の温度が上がります。やがて 100 度を超えて蒸発していきますね。その原子力の圧力容器の中に入っていますから、だんだん、だんだん気圧が高くなっていくんですが、やがて 900 度ぐらいになりますと、その燃料体をカバーしているジルコニウムというのがあるんですが、これが周りのH_2O、水の分子と反応しまして、Oという酸素がジルコニウムとくっつくんです。酸化ジルコニウムになる。水素が分離するわけですよ。大変危険ですね。

それがじゃいつぐらいになると燃料棒が露出するかというと、５号機の場合ですと６日間だと言っています、何ももし措置ができないと。ですから止まっているから安全だというものじゃないでしょうと。ですからいかにすれば安全になるかということを考えなくちゃいけない。考える力がないのかというと、あると。じゃどのぐらいあるのかというと、今傍聴者３さんがおっしゃったように、日立や三菱や、あるいは東芝、こうしたところは世界最高級の少なくとも原発をつくる方の技術を持っている。事故処理の技術は今これからですね。しかしながら、その技術を持っている技術者もいます。

一方お隣、韓国や特に中国は、原発を推進されておられるということで、そこで事故が起こると偏西風に乗ってこっちに来ますでしょう、放射能が。だから彼らも危険だし、我々も危険になる。だからどういうふうにすれば安全に使えるか、あるいは安全を確保できるかというのは、最も重要な課題です。ですから止めるとか、再稼働とかという以前に、いかにしてこの浜岡原発を安全にするかということを考える。

そこで 3000 人の人が平時は働いている、今防潮堤をつくっているから 4000 人以上です。3000 人の人にはきっと御家族もおありでしょう。そうすると仮に３人家族だとすれば１万人近い人たちがそこで働いている。その人たちが廃炉だ、これでもう未来がないと、メンテナンスを怠ったらどうなりますか。

あれだけの巨大な施設ですから、この間原子力の圧力容器の中に海水が入ってきたでしょう。400 トンの海水が入って、その理由がよくわからんと言っている。理由はつなぎ目のところが錆びて入っていったと言っているわけですが、一番新しい平成 17 年にできた５号機ですらそうです。ですから、それがどうしてかということを一つ一つ見ていかないと、それはチェックしている人が早く気づかないと事故が大きくなりますから、だからやる気をなくすようなことがあってはいけないと。だからあそこは日本最高の、いや世界最高の研究所にするというのが望ましいと言ったところが、ようやく中部電力も、今私どもそういう研究会を皆さんの前でやっていますので、時間がある人は、ジャーナリストは言うまでもありませんけれども、見ることができます、聞くことができます。記録もとっておりますから、皆さんもごらんになることができますけれども、日本最高の頭脳でやっております。

私どもは差し当たっては、この中部電力の持っている浜岡原発を危険なものを除去していくと、安全度を高めていくということで、今は止まっているので安全です。この 12 月になれば 18 メートルの防潮堤ができ上がるはずですから、もうあそこに鉄骨が入っています

けれども、鉄骨の生産は終わっていますよ。だからもう納品されているので、あとは設置するだけです。それぐらいものすごい規模で中部電力は安全度を高めるための仕事をしているのは、これは評価するべきである。福島のように、だまされたとか、あるいは裏切られたとか、そんなことを敵じゃありませんから、同じ船の中にいるわけです。

だから一緒に考えないといけないということで、危険からは目を背けない。目を背けないで正視するだけの勇気を持ちたいと。そして危険は今安全の中でどうすれば、これを一つ一つ除去できるかということを考えるべきだと。そういう考える姿勢を中部電力も持っているし、私どもも持っているし、御前崎の市民の方もきっと持っていらっしゃると、今の御発言にあったように。

そういうことで、日本は自然科学者、たくさんのノーベル賞をもらっているぐらい誇るべきところでございますから、小さな子供たちにもお茶の成分について正確な知識を得たり、この大地についての正確な知識を得たり、あるいは我々が置かれているプレートテクトニクスという地球のいわゆる運動ですね、地球は生きていますから。ですから、そうしたことについて知識を得たり、世界をつくり上げている分子や原子や、そうしたものについて発見する技術もホトニクスのあれでしょう、ホトニクスの持っている診断する機械、これでこの間のヒッグス粒子も発見したんですから。大変な技術を持っているので誇ればいいんです。

すべての人が技術を持つことはできませんけれども、そういうものに対して励ますというか、ちょっと難しい話ですみませんでした。この話になりますと、私は燃えてしまうものですから。ともかく安全を高めるためのことを通してしか、今の我々日本が抱えている問題を解決ができないということでございました。

＜知事まとめ＞

６人の方に来ていただきまして、具体的な提言も皆さん、あるいは何人かの方々からいただいております。それを形にしていくということですね。それからまたフロアーからも、御前崎のみならず県全体あるいは日本全体で抱えている問題について言われました。農振法、あるいは土地の利用計画、これが今ネックになっていますから、これは皆が気づいているので、課題がわかれば問題の半分は解決していると思っています。何が課題かを明確にすれば、あとは解決するだけですから。

そういうことで、今日は小さな問題から大きな問題まで、いろいろな具体的な形でそれ

ぞれ責任を持って御発言いただきまして、大変有意義な広聴会になったということで、今日は平日であるにもかかわらず時間をとっていただきまして、パネリストの方々、そして会場の皆様方に対しまして厚く御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。